

児童用外的統制性質問紙（GEQC）の作成と信頼性、 妥当性の検討

谷（仙谷）真弓¹⁾
兵庫医科大学臨床心理部

山崎勝之
鳴門教育大学学校教育学部

Locus of Control（統制の位置；以下LOC）は、これまでに児童の健康や行動上の問題との関連が数多く見出されている。子どもにおけるその測度では、標準化された質問紙がいくつか見受けられるが、それらの質問紙は、この領域の研究結果を混乱させるいくつかの欠点を持っている。そこで本研究では、新しい児童用外的統制性質問紙（GEQC）の開発を試みた。調査Ⅰでは、4～6年生466名の児童を対象に、因子構造の検討を行った。その結果、一因子構造が明らかとなり、計16項目が採用された。調査Ⅱでは、4～6年生1,349名の児童を対象にこの質問紙を実施し、加えて、担任教師による、外的統制性を強くもつ児童の指名（ノミネート）調査と児童自身による同特性の仲間評定調査を実施した。さらに、4～6年生の児童205名に、約5週間の間隔で質問紙を2回実施し、再検査法による質問紙結果の信頼性についても検討した。こうして、調査Ⅱでは、信頼性と構成概念的妥当性が検討された。その結果、本質問紙が構成概念的妥当性と安定性、内的整合性を兼ね備えていることが明らかになった。

キーワード：統制の位置、外的統制性、質問紙、小学児童

問 題

近年、学校教育現場では、不登校や無気力など諸々の心理・行動上の問題が深刻化している（文部省中学校課，1999）。そうした背景には、子どもたちが心理的なストレス状態に陥っていることが推測され、実際にうつ状態にある子どもが増えている（村田・清水・森・大島，1996）。一般に、児童の健康に影響を及ぼす要因には個人の内外に多様な変数が指摘されるが、その中でも、比較的安定して持続的に健康に影響を及ぼす要因として

個人の性格特性が注目され始めている（Friedman, Tucker & Reise, 1995）。この健康影響因としての性格はこれまでに多数指摘されているが、比較的大きな影響力を持っている性格の1つに、Rotter（1966）によって提唱されたLocus of Control（統制の位置：以下LOC）がある（Kliever & Sandler, 1992; Rawson, 1992）。

LOCとは、自分の行動と結果の関係に対する統制性の程度を示す概念であり、内的統制性と外的統制性を両極とする次元の連続体である。内的統制とは、物事の結果は自分の行動や意図など自分の持つ内的なものによって決定されると捉える統制性を示し、外的統制性とは、物事の結果は自分以外の外的なもの、例えば、運や偶然、他人の力によって決定されるという統制性のことである。

LOCを扱った研究は膨大な数にのぼるが、この

1) 論文は、平成12年に鳴門教育大学修士論文として提出したものの一部であり、また日本心理学会第64回大会にて発表された。本研究にご協力いただいた小学校の先生方、そして児童の皆様へ心から感謝申し上げます。

研究の推進には、この概念が構成概念であるだけにその測定方法が重要になる。しかし、Furnham & Steele (1993) が指摘しているように、測定尺度に関しては、主に以下に挙げる2つの問題点が指摘される。まず、尺度の次元に関する問題がある。Rotter (1966) は、内的であるのか外的であるのかという統制性の程度を示す LOC 概念を提唱し、それについて、内的から外的までの一次元上の尺度を作成した。しかし、その後の研究で Levenson (1973, 1974) は、外的統制性の定義の多義性を指摘して、それを「力のある他人」と「偶然」に分けて考え、これまでの「内的統制」を加えた三次元尺度を開発している。また外的統制性を示した尺度項目における因子構造が多次元となることは、多くの研究者の一致した見解でもある (Coombs & Schroeder, 1988)。しかし、ほとんどの研究において多次元構造を示さない内的統制性 (Furnham & Steele, 1993) を外的統制性に見出される因子と同等に並べ、それらを総称して性格特性 LOC の尺度とすることの正当性についてのデータは不足している。さらに、それら外的統制性の多次元性が LOC 概念そのものを分類する独立した次元として扱われるべきなのか、LOC という上位概念における下位次元として扱われるべきであるのかが論議されていないままである (樋口・清水・鎌原, 1979)。このことから、Rotter の提唱した LOC 概念そのものの次元構成を探索して、概念定義を改訂する方向も必要であり、今後の研究をもって解決するという姿勢が推奨される。しかしながら、現状においては、細分化された各次元が持つ行動や適応に対する予測的妥当性の検討が追いついていないのが現状である (Furnham & Steele, 1993)。これに対して、一次元性で大きく捉える方向については、外的統制性によって導かれる適応等に関わる諸問題に関する研究は数多くあり (Perce & Martin, 1993; Rawson, 1992)、この先の LOC に着目した介入研究を考慮した場合、一次元尺度の重要性は大きいと考える。構成概念で

ある LOC について、多次元であるという仮説を立て、概念を細分化し、収集されたデータとの整合性をもって仮説を検証することも、LOC 研究の発展の大きな流れである (Leone & Burns, 2000)。しかし、先にも述べたように、この概念の意義を健康や教育における介入の領域において見出していく場合、諸問題に対して予測力を持ち、介入レベルに有用であると考えられる一次元性の概念定義への着目が重要である。

次に、特定の行動領域に対応した LOC 尺度の発展についての問題がある。LOC には領域的なものと個別の領域を越えた一般的なものがあり、領域的な LOC とは一般的な LOC の下位に位置するものであり、学業・健康など個人の中で領域ごとに異なって存在していると考えられる。この学業や健康に限った領域的な LOC を測定する尺度の開発が多く試みられ、その個々の領域における行動との関連は、一般的な LOC を測定する尺度よりも高いという指摘がなされている (Wallston, Wallston & Devellis, 1978)。しかし Nowicki & Walker (1974) は、児童の学業領域に限った LOC を扱った IAR (The Intellectual Achievement Responsibility: Crandall, Katovsky & Crandall, 1965) と児童の一般的な LOC を扱った CNS-IE (Childsen's Nowicki & Strichland Internal-External Control Scale: Nowicki & Strichland, 1973) を比較して、一般的な LOC が、学業領域における行動に対して同等の関連性を持っていることを明らかにしている。また、個別の領域に対応した LOC では個人差が大きく、LOC という性格特性全般と健康問題など他の問題との一般的関連を推測することがむずかしくなる。そこで、一般的な関連では全般的な尺度を、特定の領域の関連では領域別の尺度を使い分けて適用するという姿勢が必要になる。

こうした概念や測定上の問題を考慮して、わが国で児童の心身の健康問題と LOC に関する研究を進めるために、わが国の既存の尺度をみると、いくつかの尺度を確認することができる。しかし、

それらの尺度はいずれも妥当性・信頼性の高い尺度とはいえない内容である。神田 (1993) は, これまでのわが国の LOC 尺度を概観して, 樋口・鎌原・清水 (1978) の尺度が別の心理・行動特性である原因帰属を問う項目の混入がみられることや桜井 (1986) の尺度の多因子性を指摘して, 新たな尺度の作成を試みている。神田 (1993) によって作成された尺度は児童用としてはわが国でもっとも精度の高い尺度であるが, 具体的な対人場面や学業場面を特定した項目や環境への不適応感そのものを問う項目内容が含まれ, 心理・行動上の諸問題と LOC の関連を不明確にする問題を持っている。また, 構成概念的妥当性の検討と LOC を扱って他の心理変数との関連をみる研究が混同し, 尺度作成のための手順に問題がある。また, 妥当性の検討については, わが国のみならず, 諸外国においても他の心理尺度や別の LOC 尺度を用いた, 弁別的・収束的妥当性の確認に留まるものがほとんどであり, 構成概念的妥当性の検討が不充分であるものが多い (Leone & Burns, 2000)。

そこで, 本研究では, わが国において児童の心身の健康問題と LOC の関係を調べるために, わが国で適用可能な信頼性と妥当性の高い尺度を作成することを目的として実施された。また, この尺度では, LOC を内的から外的統制への一次元上の概念とみなし, 特定領域ではなく, 一般的な LOC を測定することをめざした。

調査 I

目的

Rotter (1966) が提唱するように, LOC を内的から外的統制への一次元上の概念として捉え, 児童用の外的統制性質問紙を作成することを目的とした。

方法

協力者 公立小学校 3 校に在籍する 4～6 年生の 466 名について調査を実施した。その内訳は, 4 年生 148 名 (男子 64 名, 女子 84 名), 5 年生

177 名 (男子 90 名, 女子 87 名), 6 年生 141 名 (男子 75 名, 女子 66 名) であった。

調査質問紙 本研究において定義された LOC の構成概念に基づいて, 以下の 3 つの基準を設定した。1) 項目内容は, 具体的な物事の原因とその結果の内容を必ず含む。2) 具体的な物事の原因は, 外的統制性については運, 偶然, 他人の力とし, 内的統制性については, 努力, 意図, 能力とする。3) 物事の結果については, 対人領域・学業領域などの個別の領域を特定しないようにして, 「よい結果がでる／うまくできる」など広く一般的な内容とする。以上の基準は, 鎌原・樋口・清水 (1982) が成人対象の一次元性 LOC 尺度を作成した際の基準を参考にした。そして, 基準 2) の具体的な物事の原因の内容については, できるだけ均等に網羅するよう配慮した。その結果, 計 22 項目について作成された。

上記の項目群について小学校教員 20 名 (男性 12 名, 女性 8 名) に対して, 個別調査を実施し, 質問用紙における教示文や項目の表現を児童に分かりやすくするための修正を行った。その後, 4～6 年生の 196 名について集団調査を実施した。その内訳は, 4 年生 72 名 (男子 33 名, 女子 39 名), 5 年生 64 名 (男子 31 名, 女子 33 名), 6 年生 60 名 (男子 28 名, 女子 32 名) であった。全体の分布, 回答の偏り, 性差などの分析に基づいて, 主に日本語表現の検討を行い, 児童用外的統制性質問紙 (GEQC: General External-control Questionnaire for Children) の原型となる計 18 項目の GEQC (Ver. 1) を作成した。GEQC (Ver. 1) は, 外的統制性に関する項目と内的統制性に関する項目が含まれているが, 今後の外的統制性に着目した研究を考慮して, 外的統制性の方向から得点を算出し, 得点が高いほど外的統制的であることを表すものとした。項目に対する回答は, 「そう思わない」(1 点), 「あまりそう思わない」(2 点), 「少しそう思う」(3 点), 「そう思う」(4 点) の 4 件法とした。

手続き GEQC (Ver. 1) は記名方式による集団実施であり、協力者が所属するクラス単位で、担任教師が実施した。この時、児童に、回答用紙は研究の目的以外には決して使われないことを説明した。実施については、授業時間などが用いられ、回答に要した時間はおよそ10分であった。

結果と考察

項目選択のための分析 統計パッケージ SAS (Statistical Analysis System) を用いて466名(男子229名、女子237名)を対象に、主因子法による項目間因子分析を行った。因子構造を検討したところ、第4因子までが固有値1以上を示した。しかし、第1因子の固有値が3.66、第2因子から第4因子の固有値が順に、1.86、1.36、1.09であり、第1因子の寄与率は20.33%であった。第1因子から第2因子における固有値の変化が大きく、第2因子以下の固有値の変化が比較的小さかった。寄与率については、Reckase (1979) が指摘する一次元性尺度の目安となる寄与率20%をわずかながら満たす程度であった。これらの結果は、一次元性尺度としての要件を満たすには、不十分な結果ではあるものの、本尺度を一次元性であるとする許容範囲内であった。ここでの第1因子が一次元性 LOC 概念のまとまりに相当するかどうかについては、後の構成概念的妥当性の確認によって検討するという姿勢から、先の調査に進んだ。第1因子への因子負荷量にのみ着目し.29以上であった計17項目が選択された。

回答偏向項目の除去 回答の偏りを防ぐために、質問項目に対して肯定の回答(そう思う・少しそう思う)あるいは否定の回答(そう思わない・あまりそう思わない)のいずれかに、男女ともに協力児童の回答の85%以上が集中していた1項目を除外した。以上、調査1における項目分析により、選択された計16項目をGEQC (Ver. 2) とした。

調査II

目的

外的統制性質問紙について、児童ノミネート法と仲間評定法を用いて妥当性の検討を行った。さらに、質問紙の内的整合性と再検査法を用いて信頼性についても検討し、また、小学児童における平均得点と得点分布を提示することを目的とした。

方法

協力者 公立小学校7校に在籍する4~6年生の1349名について調査を実施した。その内訳は、4年生465名(男子240名、女子225名)、5年生462名(男子240名、女子222名)、6年生422名(男子196名、女子226名)であった。なお妥当性の検討のためのデータは、一部重複して用いられ、その詳細は後述する。また、再検査信頼性を検討するために、公立小学校1校に在籍する4~6年生の205名についても調査を実施した。その内訳は、4年生65名(男子32名、女子33名)、5年生71名(男子28名、女子43名)、6年生69名(男子38名、女子31名)であった。

調査質問紙 GEQC (Ver. 2) : GEQC (Ver. 1) から選択された計16項目の質問用紙で、様式はGEQC (Ver. 1) と同一である。

手続き GEQC (Ver. 2) は、調査Iと同様に記名方式による集団実施であり、協力児童が所属するクラス単位で、担任教師が実施した。また一部においては、再検査法による信頼性の検討のために、約5週間の間隔をおいて同一の協力者にGEQC (Ver. 2) が2度実施された。

構成概念的妥当性の検討のために行われた児童ノミネート法については、クラスの担任教師36名(男性17名、女性19名)が評定者となり、対象集団を受け持ちのクラスとしてノミネートを行った。対象集団は、GEQC (Ver. 2) の集団調査への協力クラス54クラスの内の36クラスであり、4~6年生966名(男子494名、女子472名)であった。ノミネートされた児童は、4~6年生の264名

(男子 140 名, 女子 124 名) であり, その内訳は 4 年生 94 名 (男子 51 名, 女子 43 名), 5 年生 89 名 (男子 47 名, 女子 42 名), 6 年生 81 名 (男子 42 名, 女子 39 名) であった. 評定者は, 「どんな時でも, 運にまかせたり, 他人に頼ったりしないで, 頑張ったり, 工夫したりして, 自分でなんとかできると考えている」という内的統制性を表現した短文に対して, 最もあてはまる児童と最もあてはまらない児童の氏名を, それぞれ男女別に 2 名ずつ記入した. この時, 該当する児童がいないとして, 記入されないこともあった.

さらに, 構成概念的妥当性の検討のために行われた仲間評定法については, 児童が自分のクラスの同性の仲間全員 (4 集団・平均 13.5 人) に対して評定を行った. 調査への協力は 2 クラスであり, その内訳は 5 年生 22 名 (男子 10 名, 女子 12 名), 6 年生 32 名 (男子 18 名, 女子 14 名) であった. 児童は, クラスの同性の仲間全員が, 「どんな時でも, 運にまかせたり, 他人に頼ったりしないで, 頑張ったり, 工夫したりして, 自分でなんとかできると考えている」という内的統制性を表現した短文に対して, どの程度あてはまると思

うか, 1~5 の 5 件法 (「ぜんぜんあてはまらない」~「たいへんよくあてはまる」) で評定した. 評定得点は逆転させて, 得点が高いほど外的統制的であるとした.

児童ノミネート用紙と仲間評定用紙において, 外的統制性ではなく, 内的統制性を表現した短文が提示されたのは, 教育的配慮のためである.

結果と考察

項目の決定と因子的妥当性の検討 GEQC (Ver. 2) の因子的妥当性を検討するため, 調査 II で得た 1349 名 (男子 676 名, 女子 673 名) に関して, 新たに主因子法による項目間因子分析を行った. Table 1 は因子分析結果と項目内容を示したものである. 結果は, 第 4 因子までが固有値 1 以上を示した. しかし, 第 1 因子の固有値が 3.72, 第 2 因子から第 4 因子の固有値が順に, 1.75, 1.12, 1.01 であり, 第 1 因子の寄与率は 23.24% であった. 第 1 因子から第 2 因子における固有値の変化が大きく, 第 2 因子以下の固有値の変化が比較的小さかった. これは, 調査 I と同様の結果であり, 再度, 本質問紙の一因子構造が確認できた. 従っ

Table 1 因子分析結果 (因子負荷量) と GEQC の項目

項目内容	第 1 因子
* 1 がんばれば, いつもよい結果がでる	.57
2 運さえよければ, うまくできる	.35
* 3 うまくいくかどうかは, どれだけ苦勞するかで決まる	.42
4 できそうにないことは, がんばってもむだになることが多い	.62
* 5 苦しくても, ねばり強くやっていたらできる	.54
6 夢がかなうかどうかは, 運やチャンスによって決まる	.31
7 自分では何もしない方が, うまくいくことがある	.48
8 何でもうまくできる人は, はじめからできる力がある	.39
* 9 むずかしそうなことでも, 自分で工夫すればうまくいく	.58
10 がんばっても, うまくいかないことはたくさんある	.42
* 11 いっしょうけんめいやれば, 何でもうまくいく	.55
12 できそうにないことは, 人に手伝ってもらった方がよい	.30
* 13 努力すれば, 夢がかなう	.57
14 自分では, どうにもできないことが多い	.43
15 むずかしいことでも, まぐれでよい結果がでる	.36
* 16 運がなくても, 自分の力でうまくやれる	.64

注. * 反転項目を示す.

Table 2 外的統制ノミネート群と内的統制ノミネート群の GEQC 平均得点

	外的統制ノミネート群		内的統制ノミネート群	
	男子 (n=69)	女子 (n=55)	男子 (n=71)	女子 (n=69)
平均得点	36.90	35.82	31.24	30.16
標準偏差	9.17	8.35	7.15	6.26

Table 3 外的統制群と内的統制群の仲間評定平均得点

	外的統制群		内的統制群	
	男子 (n=13)	女子 (n=12)	男子 (n=15)	女子 (n=14)
平均得点	2.53	3.19	2.48	2.42
標準偏差	.67	.78	.59	.72

て、第1因子の因子負荷量に着目し、全16項目が第1因子への因子負荷量.30以上を示したため、これをGEQCの最終項目として決定した。さらに、妥当な因子構造が得られていることを確認するため、全16項目で共分散構造分析プログラムAMOS 3.62を用いて、検証的因子分析を行った。その結果、一因子モデルの適合度は、 $GFI=.907$ 、 $AGFI=.878$ 、 $RMSEA=.073$ となり、許容範囲の適合度を示した。ちなみに、多因子モデルの適合度は、 $GFI=.878$ 、 $AGFI=.846$ 、 $RMSEA=.096$ となり、一因子モデルの優越性が示された。以上のことから、計16項目からなる本質問紙は、おおむね高い因子的妥当性を備えていると判断し、これを児童用外的統制性質問紙 (GEQC) とした。

児童ノミネート法と仲間評定法による構成概念的妥当性の検討 児童ノミネート法では、担任教師によって外的統制または内的統制であるとノミネートされた児童をそれぞれ外的統制ノミネート群、内的統制ノミネート群とした。各群のGEQC平均得点と標準偏差をTable 2に示した。GEQC得点について、ノミネートされた群と性別の2要因の分散分析を行った。その結果、群の主効果は有意であったが ($F(1, 260)=34.81, p<.001$)、性の主効果および群と性の交互作用は有意ではなかった (順に、 $F(1, 260)=1.28, p>.10$; $F(1, 260)<1$ 、

$p>.10$)。従って、担任教師によって外的統制であるとノミネートされた児童のGEQC平均得点は、内的統制であるとノミネートされた児童のGEQC平均得点に比べて、有意に高いことが明らかになった。

仲間評定法では、協力があつた各グループ (男子2グループ、女子2グループ) におけるGEQC得点の中央値によって、分けられた群を外的統制群と内的統制群とした。各群の仲間評定平均得点と標準偏差をTable 3に示した。仲間評定平均得点について、群と性別の2要因の分散分析を行った。その結果、群の主効果だけが有意であったが ($F(1, 50)=4.40, p<.05$)、性の主効果および群と性の交互作用は有意ではなかった (順に、 $F(1, 50)=2.16, p>.05$; $F(1, 50)=3.75, p>.05$)。従って、各集団におけるGEQC得点の中央値によって分けられた外的統制群の児童の仲間評定平均得点は、内的統制群の児童の仲間評定平均得点に比べて、有意に高いことが明らかになった。以上のことから、担任教師を対象とした児童ノミネート法と児童を対象とした仲間評定法による2つの方法によって、GEQCの構成概念的妥当性の高さが示唆された。

信頼性の検討 Cronbachの α 係数と再検査法を用いて、GEQCの信頼性を検討した結果が、Table 4に示されている。 α 係数は、全体、男女別

Table 4 α 係数と再検査法 (相関係数) による信頼性

α 係数			相関係数		
全体 (n=1349)	男子 (n=676)	女子 (n=673)	全体 (n=205)	男子 (n=98)	女子 (n=107)
.770	.777	.762	.703	.628	.777

Table 5 学年別, 男女別の GEQC 平均得点と標準偏差

	4 年生		5 年生		6 年生	
	男子 (n=240)	女子 (n=225)	男子 (n=240)	女子 (n=222)	男子 (n=196)	女子 (n=226)
平均得点	32.19	31.10	32.85	31.78	34.54	34.07
標準偏差	6.64	5.46	6.87	6.14	7.30	7.05

のいずれも.76 から.78 の間にあり, 内的整合性はほぼ満たされているといえる。さらに, 約5 週間の間隔で行われた検査-再検査における信頼性の推定値をピアソンの相関係数によって求めた。その結果, 全体, 男女別のいずれも.63 から.78 以上の相関となった。以上の結果から, GEQC は内的整合性と安定性を備えた, 信頼性の高い尺度であるといえる。

平均得点と得点分布 統計パッケージ SAS を用いて, 標準データとして 1349 名 (男子 676 名, 女子 673 名) における GEQC 得点分布を検討した。歪度は, 0.80, 尖度は, 1.53 となり, ほぼ正規分布を示していることが分かった。また, Table 5 には学年別, 男女別に GEQC 平均得点と標準偏差を示した。GEQC 平均得点について性別と学年の 2 要因の分散分析を行った。その結果, 学年および性の主効果が有意であり (順に, $F(2, 1343)=19.35, p<.001$; $F(1, 1343)=6.10, p<.01$), 学年と性の交互作用は有意ではなかった ($F(2,1343)<1, p>.10$)。女子よりも男子の方が, GEQC 平均得点が有意に高いことが示された。学年について, Tukey 法 (HSD) による下位検定を行ったところ, 6 年生が 4, 5 年生に比べて, GEQC 平均得点が有意に高いことが明らかになった ($p<.05$)。

総合考察

本研究では, 4 年生以上の小学児童を対象とした外的統制性質問紙の作成を試み, その結果, 信頼性と妥当性を兼ね備えた質問紙が完成した。ここでは, おおむね満足 of いく内的整合性と再検査信頼性が示され, さらに担任教師を対象としたノミネート法と児童を対象とした仲間評定法の 2 つの方法を用いて構成概念的妥当性の高さが示唆され, 完成度の高い質問紙となった。

しかし, 質問紙の標準化は程度の問題であり, さらに精度を高めるために検討すべき課題がある。まず尺度の信頼性であるが, この質問紙では許容範囲にある内的整合性が得られたが, その値は α 係数で.80 を越えるものではなかった。この尺度の導出にあたっては, 探索的因子分析と検証的因子分析で重ねて検討しているが, 内的整合性を高めるには, 概念を表現する項目の問題を再検討する必要がある。そして, 同時に LOC 概念そのものの次元構成の探索についても, 本研究が示した一次元性だけでは, その優越性が充分であるとは言えないため, 今後のさらなる検討が必要であると考ええる。LOC 自体は抽象的な構成概念であり, その概念を忠実に反映できる質問項目を設定することには細心の注意を払わなければならない。確かに, 本研究においてはこの尺度の構成概念的妥当性が

高いことが示唆され、このことから尺度がLOCの構成概念をとらえていることを示しているが、構成概念の検討の問題は繰り返し、他の適応に関わる心的特性との関連について検討するなどの多様な方法を用いて検討を重ねる必要がある。

このことから構成概念の検討方法が次の課題となるが、本研究では、ノミネート法や仲間評定法といった他者からの評定による間接的な方法を採用した。しかし、この方法に留まらず、実験室場面において児童が示す実際の行動の観察や測定を行うことによる妥当性の検討方法も採用されるべきであり、この方法のほうがより直接的な構成概念の検討になるものと考えられる。とは言え、本研究のように、複数の方法で構成概念の妥当性を検討したこの種の質問紙はわが国にはみられず、今後の研究の使用には十分に耐えうるものであると考えられる。とくにその方法が、長期にわたり日々子どもに接している友だちや担任教師の評定であることは、その精度の高さや社会的な妥当性の点から言っても大きな意義をもっていることが推測される。

また、標準化の問題ではないが、この質問紙については性差と学年差が認められ、この点についても考察が必要であろう。本研究の結果では、女子よりも男子の方がより外的統制的で、また学年が高いほどより外的統制的であるという結果が得られた。性差については、女子において社会的望ましさの要因がLOC得点を内的統制の方向に歪める傾向が強くなる(Nowicki & Walker, 1973)という過去の研究と一致した。年齢差についても、鎌原・樋口(1987)の研究結果と合致する結果となった。しかし、鎌原・樋口(1987)は、中学生から高校生にかけての変化の傾向を明らかにしており、本研究とは対象としている集団の年齢が異なるので、今後の検討が必要である。また、この年齢が高くなるにつれてより外的統制的になる傾向については、欧米における加齢に伴い内的統制的になるという知見(Nowicki & Strickland, 1973)

とは異なっており、わが国の児童に特有の特徴であると考えられ、この差異の原因については、今後検討する必要がある。

最後に、この尺度の適用領域について考察したいが、これまでの性格特性LOCを扱った研究の中では、様々な心理・行動上の問題との関連が明らかにされていて、特に外的統制性と抑うつを中心とする心身の健康との関連について多数報告されている(Kliewer & Sandler, 1992; Rawson, 1992)。さらに、最近の子どもにおけるうつ症状の増加が指摘され(村田ら, 1996)、この性格特性の重要性がなおさら強調される。ここから、この特性を内的統制性へと教育することにより、子どもの健康を促進する方向が考えられる。いずれにせよ、子どもの健康問題に外的統制性が深くかかわる事実を前にして、その問題に教育的に介入をするには、まず外的統制性を正確に測定できる尺度が必要になるが、本研究において作成された質問紙はその測定に適した尺度になり、この問題へと研究や教育が展開できる方法論の1つをここに提供できたと言える。

引用文献

- Coombs, W. N., & Schroeder, H. E. 1988 Generalized locus of control: An analysis of factor analytic data. *Personality and Individual Differences*, **9**, 79-85.
- Crandall, V. C., Katovsky, W., & Crandall, V. J. 1965 Children's beliefs in their own control of reinforcement in intellectual academic achievement situations. *Child Development*, **36**, 91-109.
- Friedman, H. S., Tucker, J. S., & Reise, S. P. 1995 Personality dimensions and measures potentially relevant to health: A focus on hostility. *Annals of Behavioral Medicine*, **17**, 245-253.
- Furnham, A., & Steele, H. 1993 Measuring locus of control: A critique of general, children's health, and work-related locus of control questionnaires. *British Journal of Psychology*, **84**, 443-479.
- 樋口一辰・鎌原雅彦・清水直治 1978 児童用 Locus of Control 尺度の検討 日本教育心理学会第20回総会発表論文集, 409.

- 樋口一辰・清水直治・鎌原雅彦 1979 Locus of Control に関する文献的研究 東京工業大学人文論叢 (東京工業大学 II 編), **5**, 95-132.
- 鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治 1982 Locus of Control 尺度の作成と信頼性, 妥当性の検討 教育心理学研究, **30**, 302-307.
- 鎌原雅彦・樋口一辰 1987 Locus of Control の年齢的变化に関する研究 教育心理学研究, **35**, 177-183.
- 神田信彦 1993 子ども用主観的統制感尺度の作成と妥当性の検討 教育心理学研究, **41**, 275-283.
- Kliwer, W., & Sandler, I. N. 1992 Locus of control and self-esteem as moderators of stressor symptom relations in children and adolescents. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **20**, 393-413.
- Leone, C., & Burns, J. 2000 The measurement of locus of control: Assessing more than meets the eye? *Journal of Psychology*, **134**, 63-76.
- Levenson, H. 1973 Multidimensional locus of control in psychiatric patient. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **41**, 397-404.
- Levenson, H. 1974 Activism and powerful others: Distinction within the concept of internal-external control. *Journal of Personality Assessment*, **38**, 377-383.
- 文部省中学校課 1999 生徒指導上の諸問題の現状について 教育委員会月報, **50**, 44-62.
- 村田豊久・清水亜紀・森陽二郎・大島祥子 1996 学校における子どものうつ病——Birlson の小児期うつ病スケールからの検討 最新精神医学, **1**, 131-138.
- Nowicki, S., & Strickland, B. 1973 Locus of control scale for children. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **40**, 148-154.
- Nowicki, S., & Walker, C. 1973 Achievement in relation to locus of control: Identification of a new source of variance. *Journal of Genetic Psychology*, **123**, 63-67.
- Nowicki, S., & Walker, C. 1974 The role of generalized and specific expectancies in determining academic achievement. *Journal of Social Psychology*, **94**, 275-280.
- Pearce, C. M., & Martin, G. 1993 Locus of control as an indicator of risk for suicidal behavior among adolescents. *Acta Psychiatrica Scandinavica*, **88**, 409-414.
- Rawson, H. E. 1992 The interrelationship of measures of manifest anxiety, self-esteem, locus of control, depression in children with behavior problem. *Journal Psychoeduc Assessment*, **10**, 319-329.
- Reckase, M. D. 1979 Unifactor latent trait models applied to multifactor tests: Results and implications. *Journal of Educational Statistics*, **4**, 207-230.
- Rotter, J. B. 1966 Generalized expectancies for internal versus external control of reinforcement. *Psychological Monographs*, **80** (Whole No. 609), 1-28.
- 桜井茂男 1986 領域別三次元統制感尺度の検討 教育心理学研究, **34**, 267-273.
- Wallston, K. A., Wallston, B. S., & Devellis, R. 1978 Development of the multidimensional health locus of control (MHLC) scale. *Health Educational Monographs*, **6**, 161-170.

— 2001. 5. 2 受稿, 2004. 2. 8 受理—

Development of General External-control Questionnaire for Children (GEQC)

Mayumi TANI (SENGOKU)¹ and Katsuyuki YAMASAKI²

¹Hyogo College of Medicine

²Naruto University of Education

THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2004, Vol. 13 No. 1, 1-10

Locus of control has been found to be associated with a number of problems in health and behaviors of children. Although there are a few standardized questionnaires for children to measure it, they are not without shortcomings that make interpretation of results ambiguous. So in the present study, a new standardized scale for external locus of control (GEQC) was developed for Japanese children, aged between the 4th and the 6th grades. In Study 1, the new questionnaire was administered to children of the age ($n=466$) to investigate its factor structure. As a result, it was found that one factor could be measured with 16 items. In Study 2, the questionnaire was administered to children of the age ($n=1,349$) and some of their classroom teachers nominated children that typically characterize external control, and some children rated their classmates on the same dimension. In addition, in order to check its reliability, it was administered twice, separated by about five weeks, to some of the children ($n=205$). Thus, in this study, reliability and validity of the questionnaire were investigated. Results showed that it was reliable and internally consistent, and showed concurrent validity.

Key words: locus of control, external control, questionnaire, elementary school children